

第19期日本学会議

第1部報告

人文・社会系の分野における  
研究業績評価のあり方について

平成17年4月18日

第19期日本学会議

第1部

この報告は、第19期日本学術会議第1部会において審議した結果を  
取りまとめ、発表するものである。

## 第19期日本学術会議 第1部会々員

部長	蓮見音彦（和洋女子大学学長）
副部長	宮家 準（國學院大學大学院講師）
幹事	柏木恵子（文京学院大学人間学部教授）
幹事	藤本 強（國學院大學文学部教授）
会員	天野郁夫（国立大学財務・経営センター研究部教授・研究部長）
	井口和起（京都府立大学名誉教授）
	池田知久（大東文化大学文学部教授）
	石原 潤（奈良大学文学部教授）
	井上和子（神田外語大学名誉教授、大学院言語科学研究センター 顧問）
	岩崎庸男（目白大学人間社会学部長・教授）
	江原由美子（首都大学東京都市教養学部教授）
	海老根 宏（東洋大学文学部教授）
	大橋謙策（日本社会事業大学学長）
	加藤尚武（京都大学名誉教授）
	北原保雄（独立行政法人日本学生支援機構理事長）
	小谷汪之（東京都立大学名誉教授）
	佐々木健一（日本大学文理学部哲学科教授）
	佐藤 学（東京大学大学院教育学研究科研究科長）
	袖井孝子（お茶の水女子大学人間文化研究科大学院客員教授）
	田中敏隆（大阪城南女子短期大学大学設置準備室長）
	中西 進（京都市立芸術大学学長）
	長野ひろ子（中央大学経済学部教授）
	外園豊基（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）
	本田和子（お茶の水女子大学名誉教授）
	前田専学（東京大学名誉教授）
	松尾正人（中央大学文学部部長）
	松原達哉（立正大学心理学部臨床心理学科教授）
	水谷 修（名古屋外国語大学学長）
	溝口雄三（東京大学名誉教授）
	宮本袈裟雄（武蔵大学人文学部日本・東アジア比較文化学科教授）
	山本徳郎（国土舘大学体育学部教授）

## 報告書の要旨

### 1 報告書の名称

第19期 第1部会報告

「人文・社会系の分野における研究業績評価のあり方について」

### 2 内容

大学・研究機関等の活動についての評価が重視されるようになった今日、研究業績の評価の基準や方法の整備があらためて課題となっているが、学問分野ごとの研究のあり方や業績評価をめぐる状況には、少なからず差異があり、それぞれの実状をふまえた評価のあり方が検討される必要がある。

人文・社会系の分野の場合には、その研究の特質として、研究者の価値観、個人的・文化的・社会的背景とかかわる洞察や解釈が重要な意味を持っており、研究業績の評価には十分な慎重さが求められる。最近、論文点数、国際的学会誌への寄稿、被引用度等の量的指標に基づいて業績を評価する傾向があるが、こうした方法の機械的な適用は、きわめて偏った評価結果を導き、人文・社会系の学問研究の進展に好ましくない影響を及ぼしかねない。

研究業績の評価において重視されるそれぞれの分野の専門家集団によるピア・レビューについても、人文・社会系の分野の場合には、効果あるピア・レビューの基盤をなす研究者のコミュニティが分化されており、コミュニティ相互に価値観の相克が見られるなど限界がある。

### 3 提言

このような特色を持つ人文・社会系の分野の研究業績の適切な評価のために、各学協会等において研究業績の評価についての積極的な研究を進める必要がある。日本学術会議はそれぞれの分野に相応しい評価のあり方の検討に対する指導性を発揮し、広汎な広がりをもった研究者のコミュニティの確立を進める必要がある。それとともに、関係機関での以下の諸点についての配慮が必要である。

- (1) 大学・研究機関等の研究評価を行う機関において、人文・社会系の各分野に相応しい業績評価のあり方の研究を進め、適切な基準・方法を整備すること。
- (2) 研究内容を含めたピア・レビューに対応しうる研究業績のデータベースの整備を進め、人文・社会系の分野を含めて適切な共通的な研究業績情報の様式を整備すること。
- (3) 外形的基準による評価の妥当性と限界を明らかにするために研究評価を行う機関において積極的な研究を行うこと。
- (4) 大学・研究機関等の人事選考における研究業績の評価にあたって、各学問分野の特性に応じた配慮をおこなうこと。

# 人文・社会系の分野における研究業績評価のあり方について

## 目 次

1	今日における研究業績評価の意義と問題点.....	1
2	人文・社会系分野の特質とその研究業績評価.....	2
2 - 1	人文・社会系分野の意義と特質.....	2
2 - 2	人文・社会系分野と外形的評価.....	3
2 - 3	人文・社会系の研究業績評価におけるピア・レビューの問題点...	5
3	研究業績評価の推進のための方策と提言.....	8

## 1 今日における研究業績評価の意義と問題点

学術研究が先人の研究成果の批判的継承の上に進められるものであるだけに、研究成果は本来的に評価の対象とされてきたところであり、評価の方法についてもこれまでに多くのことが考えられ、蓄積されてきた。それだけに、研究業績の評価は、学術研究に本来的に内在する課題であり、それ自体が新しい課題であるというわけではない。しかしながら、今日、学術研究をめぐって新しい状況が展開してきており、研究業績の評価についてあらためて検討される必要が生じている。すなわち、大学・研究機関等の活動についての説明責任が求められ、国立大学法人評価や大学に対する認証評価が制度化されて、大学・研究機関による自己評価に加えてこれらに対する第三者機関による外部評価が進められるようになったこと、COEなどを含めて研究者や大学・研究機関の業績評価に基づく競争的な研究費配分の比重が拡大されてきたこと、など、研究業績の評価のもつ意味が急速に増大し、その結果、評価の基準や方法等の整備があらためて検討されなければならない事態が生じている。

もちろん大学・研究機関等の活動が適切に評価され、充実した研究が一層活発に展開されるように組織や機能を改めていくことは重要なことである。しかしながら、これまでわが国においては多くの大学や研究機関を対象にして、その活動を一齐に評価することはほとんど行われてこなかったし、そうした評価の際に用いられるべき方法についてもほとんど整備されてこなかった。それだけに、評価の必要性・重要性が指摘されるのにもなって、学術研究の進展に寄与する研究評価が行われなければならないといわれ、とりわけ、学術研究の実態を反映することなしに不適切な基準や方法によって評価が行われて研究活動の発展が阻害されるような事態を引き起こすことがないように、関係者の努力が求められてきている。

この場合に、これまでの学術研究のあり方は、学問分野ごとに少なからず異なっており、また、評価の基準や方法の整備においても、これまでの進展の状況には、学問分野による差異がきわめて大きい。今後あらゆる分野において研究業績の評価が重視されるようになることからすれば、これまでに整備が進んでいなかった分野においても、評価基準や方法の整備を進める必要がある。

また、大学や研究機関の評価においては、組織そのものが多様な研究分野を含んでいる場合もあり、また機関や分野相互の評価結果を比較秤量する必要がある場合もあることから、分野を横断した斉一的な基準や方法による評価が計画されることも少なくない。こうした目的を適切に果たすためには、単純に斉一的な基準で裁断することによってではなく、それぞれの分野の特

性を配慮しつつ、分野を横断した評価を行うための基準や方法が考えられなければならないであろうが、そのような検討はほとんど行われてきていない。こうした状況のもとで性急に研究業績の評価が行われた場合、重要な研究が不当に貶価されたり、些末な研究が量的な視点からのみ評価されるといった事態を招くおそれがあり、ひいては学術研究の進展をゆがめるおそれがあると思われる。

研究業績の評価が今後ますます重要な意味をもつだけに、それぞれの学問分野の特性に応じた研究評価の基準や方法の整備を急ぐことは、今日の学問研究における重要な課題である。

日本学術会議においても、第18期に運営審議会付置新しい学術体系委員会がとりまとめた『新しい学術の体系 社会のための学術と文理の融合』（平成15年6月）において、この問題にふれ、「評価にあたっては、専門家集団における学問的意義についての評価（いわゆるピア・レビュー）が基本となる」ことを強調し、学術研究の多様性を考慮すると一様に画一的な基準を設定することは出来ないこと、論文点数や被引用回数等の定量的規準の妥当性についても、学術分野の差が大きいことなどを指摘した。その上で、「学術研究の評価に際しては、各学術分野・研究領域における多様な研究様態とその差をふまえて、それがなされなければならない。・・評価基準ないしは評価指標については、より具体的な検討が、まずは各学問分野ないしは研究分野ごとに、その特性に応じた検討がなされなければならない。」<sup>1)</sup>と述べている。

この報告は、その検討の第一歩として、こうした点についての取り組みがこれまで十分に行われてこなかった分野であり、また研究業績の評価にあたって考慮されるべき点を多数含んでいる分野でもある、人文・社会系の学問分野について、検討を行い必要な方策を提案しようとするものである。

## 2 人文・社会系分野の特質とその研究業績評価

### 2-1 人文・社会系分野の意義と特質

先に日本学術会議は、『21世紀における人文・社会科学の役割とその重要性』において、「今日の人類・地球的難問群に取り組むためのシステム設計にかかわる学術活動の大きな部分が人文・社会科学の関与なしには有効に展開できないということは、もはや自明である。今日、産業・技術が直面し解決を迫られている問題の多くが、むしろ人文・社会科学諸領域の取り組むべき課題であるということも痛感されるようになっている。このような意味で、人文・社会科学の振興は、今や科学技術にかかわる総合戦略の「かなめ」としての意味をもつものだということができる。」<sup>2)</sup>と、その重要性を強調した。それだけに、人文・社会系研究分野における研究評価が適切に行われ、その

分野の研究の振興に資する進め方がなされることは、わが国の学術にとって重要なことといえることができる。

人文・社会系の学問分野にも研究方法などにおいて多様なものが含まれるが、その多くは人文・社会系にある程度共通する独自の方法によって研究が行われている。いくつかの特質をあげるならば、古典をはじめとする文献研究が重視されており、その背景におよぶ広く深い資料の収集・解析の上に進められる洞察と独創的な解釈が業績を形成する。資料や実証データに基づく分析においても、単にその把握と分析から得られた知見にとどまらずに、文献研究において養われた洞察と解釈が重要な意味を持つ。したがって、人文・社会系の研究にあっては、個々の研究者の価値観、個人的・文化的・社会的背景が、文献・資料・データから導かれる洞察・解釈に大きくかかわることになる。研究業績はこのようにして積み上げられた長年にわたる研究の蓄積であり、それを評価するにあたっては、それぞれの研究成果の内容を精査するとともに、研究の背景となる歴史的・文化的・社会的状況を踏まえ、研究者の内面にまで及ぶ理解が目指されなければならないことになる。こうした人文・社会系の研究のあり方を考えるとき、その業績評価は十分に慎重に行われなければならないこと、単純に相互の優劣を比較することが困難であること、研究者・評価者の双方の価値観がかかわらざるを得ないものであること、などが指摘されねばならない。

## 2 - 2 人文・社会系分野と外形的評価

人文・社会系の諸分野の研究業績の評価がさまざまな困難を含んでおり、慎重に扱われなければならないことは、これまでもしばしば指摘されてきたところであるが、どのような考慮が必要であるかを具体的に指摘した例は必ずしも多くない。それだけに人文・社会系の分野の評価にあたって必要とされる配慮を具体的に示さない限りは、他の分野で行われている方法をそのまま適用することが想定される。しかしながらその場合には、いくつかの重要な問題点が生じることとなるものと思われる。

近年、研究業績の評価においては、論文点数、国際的学会誌への寄稿、被引用度等の外形的な量的指標に基づいて、業績評価を行うことがいくつかの分野で行われるようになり、こうした方法によって標準化がなされる傾向がある。しかしながら、人文・社会系の諸分野では、これらの指標によって業績評価を行うことが困難である場合や、不適切である場合が少なくない。とりわけ、これらの指標に基づいて異なる学問分野の研究者を、業績の上で相对比较するというような場合には、こうした評価法になじまないことの多い分野が不当に低く評価されるという危惧がある。

もちろん一口に人文・社会系といっても、研究の様態も、成果の発表の形

態や方法も、また評価にあたって考慮すべき事項も一様ではないが、おおよそ人文・社会系の諸分野については、以下のような特質が見られる。

- 1) 論文点数は、研究成果の量的指標と考えられるが、学問分野によって、また研究の態様によって、その多寡には大きな開きがある。複数の研究者が共同で行う実験結果のとりまとめを論文として発表することの多い分野に比べて、単独で資料の丹念な蒐集・分析と熟考の結果をまとめることが一般的な分野における論文の発表数が少ないことは容易に理解されよう。
- 2) 専門的な内容の著書は、人文・社会系の研究業績としてきわめて重要であり、単なる教科書ないしは啓発的な書物として位置づけることはできない。
- 3) 研究業績としてオリジナルな研究成果が重要であることはいうまでもないが、文献研究の重視される分野等では、先行の研究業績の翻訳や評論の中に価値の高いものが含まれることがある。また、古典的な文献の翻刻・校閲・解説・編纂等の業績、学術書籍や資料集等の編纂、事典・辞書等の編纂、等のうちにもきわめて価値の高いものが含まれる場合がある。さらに、美術館・博物館等の解説資料や展覧会等のプログラム・目録等の解説やその編纂等の中にも、学術的な価値の高いものも含まれている。
- 4) 著書や論文として発表されたもの以外でも、各種の調査報告などの内には、新たな知見や重要な指摘を含む、きわめて価値の高いものが含まれる場合がある。また、調査や分析の方法として、創意ある試みをともなっとなされたものも含まれる場合がある。研究の成果の発表の形態によって一律に取り扱うことは適切でない。
- 5) 論文が英文で書かれていることを必須とする傾向があるが、人文・社会系の場合には、日本の歴史・社会・文化などの日本研究のように、日本語で表記すること自体が重要である場合もある。また、中国・朝鮮・ロシアなどの社会・文化等の研究などでは、当該言語による論文が世界的に重視されている。また、研究分野によっては、主要な研究業績は日本語で表記されており、英文で表記される論文はむしろ特殊なものに過ぎない場合もある。
- 6) 国際的な学会誌に掲載された論文は、一般に評価される。ただし、分野によっては、国際的な学会誌が十分に普及していない場合もあり、国際的な学会の存在しない分野も少なくないことも留意する必要がある。
- 7) 国内の学会誌などの、レフェリー制を採用している学術誌に掲載された論文は、評価される。ただし、学会によっては、一定水準を超えた研究者は、レフェリーによる審査の対象とならない場合もあり、また学会誌にはもっぱら若手の研究者が投稿する状況にある場合もある。

- 8) 分野によっては、研究会誌・同人誌などに重要な研究業績が発表される場合もあり、大学紀要等になされる場合もあり、内容に基づいて評価・判断される必要がある。
- 9) しばしば重要視される論文の被引用度については、人文・社会系のほとんどの分野では被引用度についてのデータが整備されていない。
- 10) 学会賞などの受賞者については、それ自体尊重される必要があるが、学会賞などのうちには、優れた業績やその研究者を表彰するものと、特に若手の研究者に対する奨励賞としての意味あいのものがあることを考慮する必要がある。また、すべての分野に同じように学会賞の制度が整えられているわけではなく、こうした表彰制度をもたない分野もある。
- 11) 論文等の形で発表されるものにとどまらず、文学や美術等における創作活動や展覧会等の企画などの活動、音楽の演奏や演劇等のパフォーマンス、体育学における優れたアスリートの育成、といった、さまざまな表現形態による活動も重要な意味を持っている。これらについての評価にも配慮する必要があると同時に、芸術活動と学術活動の境界線をどのようにとらえるのかという課題についても考察される必要がある。
- 12) 研究成果は、学術的な意義に限らず、地域的、国家的、国際的な広がりにおける社会的な貢献としての意義をも果たしており、この点についても評価が行われる必要がある。たとえば、地方史・地誌・地域の資料集の編纂、地域における演奏活動・展示活動・社会教育活動、国の政策形成・その批判的検討・社会運動への研究成果の反映、福祉や身体的・精神的健康にかかわる臨床的な実践、研究活動の発展途上国援助への貢献などの国際貢献、等について考慮される必要がある。

これらの特質を考えると、人文・社会系の分野の研究業績を外形的規準に基づいて、他の分野と平行して評価することには大きな問題があるといわざるをえない。

### 2 - 3 人文・社会系の研究業績評価におけるピア・レビューの問題点

人文・社会系の分野における研究業績評価にあたって、論文点数等の定量的評価のみを用いることにはきわめて問題があることから、業績内容に関する当該分野の専門家によるピア・レビューが重要であるといわれる。しかしながら、ピア・レビューについても問題点は少なくない。

まず、ピア・レビューには多大な量の評価作業を必要とするという点があげられる。広範な学問分野にわたって、大量の研究者を対象として、一斉にピア・レビューを行うといった事態を考えたときに、それに注ぎ込まれる労力や、評価を担当するそれぞれの分野の専門研究者の確保などについての問

題点が予想され、果たしてこのような評価の方法が有効に機能するのかといった疑問がまずは考えられる。

それ以上に、人文・社会系の研究におけるピア・レビューには、重要な問題が内包されているように思われる。ピア・レビューが適切に成立するには、当該の学問分野における共通の価値観に支えられた研究者のコミュニティが成立していることが前提となる。こうしたコミュニティが、広範な広がりを持ち、共有される価値観の奥行きが深くなるほど、ピア・レビューはコミュニティを構成する研究者によって支持され、当該分野の学術研究の進展に有効に寄与するものとなるに違いない。逆に、学問分野の内部においてこうしたコミュニティが亀裂を見せたり、不透明であったりする場合には、研究業績に対する評価も統一性を失い、研究の進展に有効に働くことが少なくなるように思われる。人文・社会系の研究分野の状況を見ると、そこでの研究者のコミュニティの在り方には、なお大きな問題が残されているように見受けられる。

まず第一に、個別的な学問分野ごとに学協会が組織され、当該分野の研究者のコミュニティが形作られているが、人文・社会系の場合にはそれぞれの学問分野をさらに分節化した小規模な学協会が組織される例が少ない。それらを広く統合した広範な学問分野にわたる研究者のコミュニティは、構成されていないか、ほとんど機能していない。むしろ専門分化の進むのにもなって学協会を中心とする研究者のコミュニティも分化していく方向がうかがわれる。アカデミーとしての日本学術会議は、学協会を横断した広い領域の研究者コミュニティを構築するという役割を担うべきであったが、これまでの歴史の中でその成果を上げ得たということはできないであろう。今後の新たな体制の日本学術会議が担わなければならない重要な課題がここにある。

第二に、それぞれの分野において、研究者の間に価値観の分化が進み、分野の中でのコミュニティの亀裂が見られる例が少ない。例えば、世代によって研究の関心や方法論が大きく異なり、若い世代の研究者の間での評価と一定年齢以上の研究者の間での評価が鋭く対立するといった事例が見られる。このことは、基本的には、社会の変化が激しさを増し、急激に時代が移り変わるようになったことによって、世代間の価値観の対立が従来にもまして顕著になったということに基づくものであり、そこに今日の時代における研究者のコミュニティをどのように構築していくかを考える上での問題点の一つが含まれていることは否めない。しかしそれだけでなく、とりわけわが国の場合には、学問分野によって差異はあるとはいっても、研究者の養成や学問研究の成果の継承にかかわる問題点が含まれていることが見逃せない。

新しい研究が先行の研究を基盤としながら展開されなければならないにもかかわらず、従来の研究の成果が適切に継承され、若い研究者に十分に継受されないままに、新たな状況に対応する研究に取り組みられることが少なくないといわれ、そのために前の世代の研究者との間に断絶を作り出しているのではないかといわれる。この点に関しては、研究者の養成における、とりわけ大学院教育の体系が各研究分野においてどのように整備されているのかという問題であろうし、学問研究の成果の継承にかかわる問題としては、これまでの研究成果やその原資料を集積し、有効に活用できるような体制がきわめて部分的にしか整備されてこなかったという、研究をめぐる貧困な状況があらためて想起される。これらの点についても、日本学術会議は、これまでも努力を重ねてきてはいるが、未だに改善を見ないでいる点が少なくない。新しい体制に移行する機会に、日本学術会議は、あらためて人文・社会系の学術研究の発展にとって、こうした点の整備の重要性を喚起し、改善を図るための先頭に立つ必要がある。

もちろん、人文・社会系の学問分野においては、本来、研究は、それぞれの研究者の価値観・歴史観・世界観に根ざして行われる。それだけに、今日のように価値観の多様化が進む時代においては、それぞれの研究に対して、研究の意義や目的をめくっても異なった価値観に基づくきわめて対立的な評価が行われることが少なくない。それぞれの学問分野において多様なコミュニティが生み出され、それぞれに異なった観点からの評価が行われるという状況が広がっている。このことは、しかし、研究そのものが価値観に根ざして成立することの多い人文・社会系の研究においては、常に内在されている、むしろ当然のことであるとさえ言わなければならない。ピア・レビューという方法は、外形的な規準に基づく単純な数量的な評価に比して、より内容におよぶものとして意味のあるものではあるが、人文・社会系の研究の特性を考えたとき限界をもつものであることが自覚されなければならない。

このように、人文・社会系の学問分野における研究業績の評価においては、一般には重要とされるピア・レビューについても、多くの問題点があり、その適用には慎重さが求められると言わなければならない。それだけに、評価にあたって多大な労力を要するピア・レビューを、広汎な領域と規模の研究を対象に取り入れることには、それなりの考慮が求められるところである。ピア・レビューは、ほかならぬそれぞれの分野の、可能な限り有能で高い声価を得ている研究者の負担によって行われざるをえないものである。有効な成果の得られることが確実に見込まれるとは言い難い作業にこうした研究者を多数動員することが、果たしてこれらの分野の研究の発展に寄与することであるのか否か、慎重な検討が求められるところである。

日本学術会議は、今後、わが国における科学者コミュニティを代表する機関として活動を展開していく。それだけに人文・社会系の研究者が構成するコミュニティについても、その形成・充実に向けた取組が展開されていくであろう。こうしたコミュニティの構築は、共有される価値観の広がりを拡大して、評価の基準や方法についての相互の信頼性を高めることになるであろうが、それと平行して、人文・社会系の分野の研究についての適切な評価の在り方とそれを有効に機能させていくために必要な条件等についての研究も進められる必要がある。

このように見てくるならば、日本学術会議の人文・社会系の研究分野の発展にとっての役割はきわめて大きいものがあり、21世紀における人文・社会科学の重要な役割を發揮していくためには、これらの分野の学協会を基盤とした広範なコミュニティの構築が前提となることがあらためて確認されるところである。

### 3 研究業績評価の推進のための方策と提言

研究業績の評価は、大学・研究機関の評価をはじめ多くの場面で重要な意味を持っている。それだけに、人文・社会系の研究業績の評価については、その研究のあり方に相応しい評価の方法を具体化すべく早急に検討を行う必要がある。人文・社会系の学問分野のうちにも、もっぱら文献研究によるものから、実態調査を行うもの、実験的な手法を利用するものまで、多様な方法が用いられており、研究成果にも多様なものが含まれる。したがって、研究業績の評価には、こうした研究方法の差異を配慮することが必要である。このためには、人文・社会系のうちでもそれぞれの学問分野の特質を配慮することが望まれる。このために、各学会等において業績評価の在り方についての研究を積極的に進める必要がある。

日本学術会議には、広範な領域を網羅して、公正で客観的・中立的な立場から研究業績評価の基準や方向を検討する役割を担うに相応しい機関として、それぞれの分野に相応しい評価基準の検討を推進すること、個別の学問分野を超えた広汎な広がりをもつ研究者のコミュニティの確立を進めること、が求められる。とりわけ人文・社会系の分野については、日本学術会議の指導性によって、望ましい評価の進め方が検討されることが望まれる。

このような日本学術会議自らの取組に加えて、研究業績の評価に関わりの深い機関等において、以下のような取組がなされることが必要である。

- 1) 人文・社会系のそれぞれの学問分野に相応しい業績評価のあり方についての研究を進め、適切な基準・方法を整備する必要がある。このため、国立大学法人の教育研究の評価を行う機関や大学等の認証評価を行う機関な

どの、大学・研究機関等の評価を行う機関においては必要な研究を早急に進めるとともに、大学等に求める研究業績についての情報提供の方法や自己評価の視点等についてさらに検討を行い、各分野の研究の状況を反映しうるものとなるような工夫が求められる。

- 2) 研究業績に関するデータベースの整備にあたっては、論文点数等の外形的基準にとどまらず、研究内容をも含む研究業績についてのピア・レビューを重視するという要請に対応しうるデータベースを整備する必要がある。研究者情報データベースを作成整備する機関においては、適切な様式の作成と利用について一層の研究を行うことが望ましい。
- 3) 外形的基準による評価の妥当性と限界を明らかにし、より適切な統一的な評価基準を検討するために、それぞれの分野において妥当とされる評価結果と外形的基準による評価との一致度や乖離についての分析を行うなどの、評価にかかわる研究を行うことが求められる。研究評価にかかわる機関における積極的な研究が進められるべきである。
- 4) 大学・研究機関等における人事選考にあたっては、公募制などの採用が拡大されているが、一層その実質化を図り、透明性を高めるとともに、業績評価における各学問分野に相応しい配慮が望まれる。

- 
- 1) 「学術研究評価の多様性とその評価基準 特にいわゆる実学的分野の評価基準と定量的評価の適用の限界に関して」(日本学術会議運営審議会付置新しい学術体系委員会『学術の体系 社会のための学術と文理の融合』平成 15 年 6 月) 64,68 頁  
なお、同様の趣旨は、この委員会の委員による櫻井孝一「学術研究評価の多様性とその評価基準 特にいわゆる実学的分野の評価基準と定量的評価の適用の限界に関して」『学術の動向』2003 年 10 月にも示されている。
  - 2) 日本学術会議第 1 部・第 2 部・第 3 部『21 世紀における人文・社会科学の役割とその重要性』平成 13 年 3 月 26 日